

「日本のデンマーク」安城に見る我が国の海外文化の受容に関する一考察

村井 誠 人

一

愛知万博（正式名称：「二〇〇五年日本国際博覧会」）¹「愛・地球博」の関連事業として、愛知県安城市が二〇〇五年四月二三日から六月一九日までその姉妹都市（友好都市）デンマークのコーディングKolding市の協力を得て、「一市町村一國フレンドシップ事業特別展「北欧デンマークの輝き」と題したかなり質の高い展示を安城市歴史博物館を会場にして展開したことは注目すべきである。また、安城市が一デンマーク都市と姉妹都市の「縁組」を結んでから（一九九七年）、まだわずかに十年をも経過していない事実にも筆者は注目する。

安城市がデンマークの姉妹都市と協力して、デンマークに関わる見事な展示を行なったということには、多くの人々は「想定内のこと」として驚かないであろうが、それはいかがなものであろうか。というのは、安城と言えば、周知のように、「日本のデンマーク」ま

たは日本デンマーク」と自他ともに認識し、多少大げさに言えば、若い世代を除くとはいえず、安城市を訪れたこともなく、日常的になら同市と関わりのない生活を送っている人々にとつても、その「日本のデンマーク」という名称は知られている状況がある。実際、一九二〇年代前半にまで安城を含む碧海郡と「デンマークのイメージ」との結びつきは遡りうるのである。また、農業の先進地という文脈から、積極的にその地域の「自称」も「日本デンマーク（日本丁抹）」と呼び慣わしていたし——ここでは、格助詞の「の」がたぶん意図的に省かれたのである——、この地の現代の人々が「安城の近代」を「日本デンマークの時代」として表記している。さらに、第二次世界大戦後のわが国の復興期に、再び「日本のデンマーク」という名称が戦後教育の平和国家建設の文脈に触発されて——内村鑑三の『デンマーク國の話』の翻案「緑のデンマーク」（高橋健二）等の教科書掲載に連動するような形で——、この地を表す語として小・中学校の社会科学教科書の中に現れていたのである。¹

しかし、以上のような状況から、いわば当然のように見える現象

は、実態においてはいかなるものであつたのであろうか。その安城とデンマークのかかわりは古くからあつて当たり前だと想定される状況があつたにも拘わらず、その実質的な歴史的関係性はいつたいどのよう^②に存在していたのであろうか。

その呼称に関する現象の社会史的分析・研究は、すでに愛知学泉大学教授岡田洋司によつてかなり徹底的になされてきており、それらは大いに参考となる。^③一方、たとえば東海道新幹線三河安城駅——一九八八年に開業したその駅舎は、意匠としてデンマークの農家を模したものと*いわれるが!*——で近年まで販売されていた「Oh! デンマーク」なる「駅弁」の中身が示すように、「デンマーク」という名がついていてもそこにはデンマークの食卓などを想起させる何物もない状況から、ひとつのヒントを私たちは得ることができる。この地がデンマークという「本家」とは実態として関係がなくとも——すなわち、自らが「日本デンマーク」という「本家」そのものなのであるから——、その名に「デンマーク」と冠しているということが重要であり、極端に言えば、「デンマークが何であるか」は、この地の「日本デンマーク」に関わる人々にとつてはあまり重要なことではなかつたのかもしれない。そしてそれゆえ、姉妹都市となるといつたような実質的なデンマークとの関わりも、ようやく上記の一九九七年まで起こらずとも、安城の人々の気持ちを不安にさせることなどなかつたのである。それは、その名称の由来はどうであれ、この地がそう呼ばれてきたことに意味があり、そう呼

ばれることと、また、自らそう名乗ることとの区別が曖昧なままに、数十年という歳月が経過してきたことを示しているのである。

こうした状況を考えるとき、この地がなぜデンマークに譬えられるようになったのかを検証する手立ての一つとして、「日本のデンマーク」と呼ばれた^④時期に厳密に絞つてその時代状況を把握する必要があり、また、語感として第三者的な「他称性」を有する「日本のデンマーク」と、当事者である「自称性」の意味合いをもつ「日本デンマーク」との認識的区別に、まずはこだわつてみる必要性がありそうである。

二一

天野暢保が、「また、二四年(大正一三)には、県農事試験場(池浦町)場長の上野操なまのが「安城農報」に、安城のことを「今や日本デンマークであると賛美絶叫させられるにいたり」と書いている。だから二四年にはすでに日本デンマークの名はあつたわけである」と記している。実際、岡田洋司、元安城市歴史博物館館長、神谷素光(一九二六—一九八三)らによつても、「日本のデンマーク」という言葉が初めて現れた年が一九二三年であろうとされていることは、大変興味深い。神谷の次の表現は傾聴に値する。^④「日本デンマークという名は、碧海郡の農村につけられた名称である。「中略」この時代、デンマークは世界有数な農業国であつたことからその名がつけられ

たことは、この地域が、日本での農業先進地として認められることになったといえよう。それはいつのことかという点、一九二三年（大正一二）のことである。（『碧海郡案内』による）日刊新聞紙上に、碧海郡の農業の紹介記事が掲載され、その見出しとして『日本のデンマーク』とつけられていたことに始まるという。この見出しは、碧海郡の農業関係者としては、降ってわいてきたような話だったから、なぜ『日本のデンマーク』といわれることになったものか、どこがそうなのかを、その似ている点を見つけたさねばならなくなってきたのだった。続けて神谷は、最初に「日本のデンマーク」を特集した雑誌『農政研究』（一九二六年）内の古瀬傳蔵の記事を紹介し、「愛知県碧海郡を日本のデンマークと謳歌し始めたのは、ごく最近のことであるが、その命名は、だれがつけたということなしに、一度碧海郡を視察したものが期せずして発する賛美の声である。しかし、当郡の有識者に向かつて、これはデンマークに似ておりますか、あるいはデンマークに習ったものですか。と質問すると、大喝一声、われわれはデンマークがどんな理想国であるか、そんなことは少しも知らない。もしデンマークに似ている点があるとすれば、それは期せずして一致したものである」と、「日本のデンマーク」と呼ばれる側の偽らざる本音ないし当惑を示している。そして、「それでも、デンマークという名がついた手前、しばらくは似ている似ていない論争が起った」と、神谷は文章を続ける。

以上のことから考えて、「日本のデンマーク」という表現が、実際

に新聞等で用いられたとするならば、それは、本来、碧海郡側の額に汗を流して大地に向き合う農民によるものではなく、初めは多分ジャーナリストか誰かが、第三者的観察者の目でその地で展開される農村の繁栄を目指した試みを「デンマーク（丁抹）」という言葉で認識し、そう表現したのであると、私たちは想像する。したがって、この地の呼び名としては「日本のデンマーク」が先にあり、その外部から規定された呼称に半ば困惑する人々の情景が、神谷の表現によく表れている。また、神谷は、一九二七年の『碧海郡の農業』の記述から、「日本のデンマーク」といわれる根拠は、（碧海郡にはない筆者）酪農ではなくて、産業組合の仕組みだということになってくる。そうすると厳密には『日本のデンマーク』とはいえないようになってしまう。それで格助詞『の』を省き、『日本デンマーク』といい変えられていったものではなからうか。『の』を省くことによつて、似ているという意味合いを、持たせないことになるからである」と説明している。そしてその「の」無しの「日本デンマーク」の初出を一九二八年の安城町農会発行の『安城の農業』というパンフレットであるとし、その第五章の一節に、「日本デンマーク」という表題がつけられていたことを証拠としている。もちろん、彼は一九二八年以降「日本デンマーク」といういい方に変えられていく」とは記したものの、「しかし、はっきり統一されたものではなく、『日本のデンマーク』も両用されていく。そのためどちらが本当の呼び名なのかが問題となり、後々までも尾を引いていくことになる」と述

べているが、⁽⁵⁾こうした指摘は重要であろう。とくに、両者どちらでもありとする論述では——あるいは、安城市歴史博物館刊の「常設展示案内」カタログ（一九九一年）のようにすべて「日本デンマーク」で統一したりする⁽⁶⁾——、時間的推移の意味を読み取ることが難しい。それらの表現が文章の中に区別して登場するとき、少なくとも読者は「の」付きか、「の」無しか、の検討をすることで、その表現が用いられている時代状況を把握できる可能性がある。ただし、たとえば一九二六年の前出の『農政研究』の特集「日本の丁抹号」において、すべてが「日本の丁抹」というように「の」付きであるのが、山崎延吉論文の表題は「日本丁抹」とある。⁽⁷⁾しかし、その本文では、「日本の丁抹」と必ず記されており、さらに目次にはその箇所が「日本の丁抹」と記されているのであるから、表題のそれも「の」付きで読むべきものと思われる。すなわち、固有名詞における「源 頼朝」やら「井内」と書いて「いのうち」と読むような表記と同様であろうと思われる。

また、第二次世界大戦後に安城一帯が「デンマーク」という語との関連で教科書等で語られるときは——当地に直接関わらない者がそれを表現しようとするとき——、「日本のデンマーク」として「の」付きで表現されるのが普通であった。それゆえ、神谷の説明はかなり説得力を持っているといえよう。また、岡田の紹介する岩瀬和市の記憶（『汗堂回想録』）の中の表現では、まさに「日本における丁抹」が一番最初の表現であったとされるのであるから、⁽⁸⁾そうし

た状況からは、かなり意図的な「の」無しの「日本デンマーク」なる呼称が、時代状況の連続としてそれを無視しうるといった具合にストレートにつながっているとは思えない。そして、本論が問題とする「日本のデンマーク」と初めて呼ばれた時期を検討する際には、当然、安城一帯が第三者によって「日本のデンマーク」と呼ばれたことを前提とするものである。

三

一九二三年の八月末からの一週間、碧海郡依佐美村野田で修養団愛知県支部主催による農村青年を相手に「農村文化講習会」という会が開かれた。⁽⁹⁾修養団とは、一九〇六年に発足した「個々人の修養」をとおして国家・社会全体の改善・改良をはかることを目的に「流汗鍛錬、同胞相愛」をスローガンにした全国的組織であり、一九一九年には安城の愛知県立農林学校で修養団愛知県支部の発会式が行なわれている。支部長には、同校校長の山崎延吉（一八七三—一九五四）が就任し、その手足となったのが同校を卒業していた依佐美村野田出身の稲垣稔（一八九九—一九八三）であった。修養団は、通常、数日間、講師・講習生が合宿を行なう講習会を行っており、一九二三年三月県支部が（前支部長宅から）碧海郡に「戻され」、稲垣を中心とする依佐美村野田の分団「向上社」に移され、稲垣は碧海郡支部幹事長から県支部幹事長となり、その最初の大き

な行事が「農村文化講習会」であった。それは「修養団講習会をそのまま踏襲するものではなかった」と岡田は紹介している。その稲垣らの意図は、「夏期体現大学開設」であり、「敢て云ふ、地方農のために大学の開設は何故になきや。〔中略〕時代はこゝに未だかつて、試みられざる夏期の一日月に体現を主とする大学を設置しやうとする。〔中略〕しかるに本大学はほとんど農閑期にして、且つ、体現に最も好都合の尾三平原の中央たる地に官僚によつて組織されず民人によつて成る〔以下略〕」とすることであつた。「農村文化」と銘うっていることと、その農村文化講習会を「農村社会における自前の高等教育の場」として位置づけていることに、注目する必要がある。この動きは、岡田が言うように「長野県等の自由大学運動、すなわち大正デモクラシー的文化運動とも共通する意識であつた」であらうが、講師陣の顔ぶれや後述する状況を考慮するならば別な要素も考へよう。

本会には、一六七人の講習生が参加し、講演のあい間にデンマーク体操が行なわれ、講演者名のなかに矢作栄蔵（一八七〇—一九三三）・那須皓（一八八八—一九八四）（ともに、東京帝国大学教授）および支部長である山崎延吉らの名が挙がっている。また、岡田の作成した「修養団愛知県支部・碧海郡支部主催の主な講習会（大正期分）」の表には、講演者として公法学者であり神道思想家の寛克彦（一八七二—一九六二）（東京帝国大学教授）の名が一九二二年八月に、また一九二四年八月に加藤完治（一八八四—一九六七）（山形県

自治講習所長）の名が挙がっている。

じつは驚くべきことに、山崎を除くこれらの人名が同じ一九二三年にデンマークの『ロスキレ国民高等学校年報 *Postside Højskoles Aarsberetning*』に、その国民高等学校校長アナス・ヴィーゼル Anders Vedel（一八七八—一九三九）の「国民高等学校と日本」と題した一〇ページにおよぶ手記のなかで登場しているのである。また、一九二七年には、全国規模の『国民高等学校新聞 *Højskolebladet*』（週刊誌）に四週にわたつてエアンスト・ボーロフ Ernst J. Borup（一八九四—一九六二）による「日本のホイスコーレマン」と題された連載手記が掲載され、そこには再び上記人物の名とその人間関係・言動が明確に語られており、さらに文脈上、名前は挙げられていないものの、山崎延吉に該当する人物も登場している。

国民高等学校とは、デンマーク語の「フォルケホイスコーレ *folkehøjskole*」のいわば直訳であり、デンマークでは通常、詩人であり聖職者のグロントヴィン G. S. Grundtvig（一七八三—一八七二）が最初に構想し、一八四四年に最初のそれが設立され、生徒たちは初等教育を経たのみで「世に出ていた」一八歳以上の若者たち——それが主に農村での生活者で、結果としては農民ということになるのだが——と理解されている。それゆえ、それは「農閑期」に一月から二、三か月のあいだにその学校に寄宿し、歴史教育などを通じてデンマーク人としての教養を若者たちが身につける「国民的啓発」の場と考えられてきた。一八五一年にクレステン・コル Christen

Koizumi (一八二一—一八七〇) によつて、それぞれの国民高等学校がひとつの「家」のような、校長の人格的指導性に導かれた寄宿制の教育システムが確立され、一八六四年から一九〇〇年のあいだに隆盛期を迎え、その数は全デンマークでは八〇校ほどになっていた。

それらは、すべて公立ではなく、また、卒業免状もない。すなわち、当時デンマークにおいては、「フォルクホレン」すなわち民衆(国民)の大多数は農民であり、これらの学校が、都市の教養市民層を育成する伝統的「ラテン語学校」ではなく、農民を相手とする補修学校的な意味を持ち、まさに上記の時代にあつてその存在がデンマークの農産物輸出の成功をもたらした「協同組合システム」を機能させる背景を形作る源となつた、と理解されてもおかしくはなかつた。

上記二つの手記は、日本の「国民高等学校人」と自称してデンマークの国民高等学校人のあいだに「忽然」と現れた加藤完治という人物の彼の地における滞在とその言動に関する記事である。加藤は一九二二年の九月に日本を発ち、一二月末にデンマークに入り、およそ一〇か月間滞在し、その間の二か月間ロスキレ国民高等学校に寄宿していたし、また一九二六年の六月末に、妻とともに再び現れ、その年の一二月までデンマークに滞在した。何でもデンマークをよしとする「丁抹謳歌者」⁽¹⁴⁾として国民高等学校を訪れる多くの日本人とは違って、祖国および自分自身を前面に押し出して語る「例外者」であつた加藤のデンマーク人に与えたインパクトは、二つの手記が示すようにけつして小さいものではなかつた。彼は、初め、

自らが日本の山形の「国民高等学校」の校長であることを伝えていゝる。二度目の訪問直後には、茨城県友部での新たな「国民高等学校」の校長となるのであるが——それは日本語の音声を書写してデンマーク語の文中に「Tomobe Kokumin Kotogako」と紹介されている——、第一回目の滞在中でヴィーブルに強い印象を与えたように、第二回目の滞在中でも彼の積極的な自己主張はポーロプをはじめデンマークの国民高等学校人たちに概ね好まれたようである。

加藤完治とは、「満蒙開拓青少年義勇軍」(中公新書三二五、一九七三年)の著者、上笙一郎の表現によれば「特異な農本主義思想家」とか「天皇制的農本主義者」であり、戦前のわが国には特別な意味を有し、満蒙開拓青少年義勇団の発足と八万五千人以上にのぼる少年たちを満州の地に送り出したことに責任を有する人物であつた。彼の「国民高等学校」の理解は、「国民高等学校」とは一五歳くらいの農民の子弟に農業を教えるところであり、人格的に優れた教師が生徒とともに農業労働に汗を流し、寝食をともにすることで、そこで生徒は自己啓発的に日本人精神を鍛え上げ、有能な日本人国民へと育っていくべきところであつた。また、農地に乏しい日本の特殊事情として、立派な日本国民として育つた農家の次、三男以下のものに対しては、かれらの耕作すべき土地を日本の西側に横たわる大陸に求めた。すなわち、彼にとつては、「国民高等学校」なるものへの関心が、必然的に彼の生徒を「満蒙の地」へと誘うことに連なつていったのである。彼がデンマークを訪れたはじめの時点から、農家

の次、三男に関わる耕作地の問題は、彼の関心事であり、一農家あたり、平均一七ヘクタールを有するデンマークの農業事情とは、問題が異なることを認識し、そして、デンマークにあつてあれこれのことを見ても、「国民高等学校とは何か」という自分の確信は揺るがなかつたようである。

四

加藤完治の最初のデンマーク滞在を綴った『訪欧所感』の口絵には、渡欧船「箱根丸」と、見送りにきた「容貌魁偉」な山崎延吉と小柄な加藤との甲板上でスナップ写真（神戸港にて）とが掲げられている。また、二回目のデンマーク行きを綴った『滞欧所感』には、神戸に向かう途上、「安城で山崎延吉先生宅に（夫婦で）一泊。久しぶりで皆々様にも御眼にかかり多くの青年諸君とも会談し得て楽しく一夜を過ごした」と加藤は記しており、¹⁶加藤と山崎の関係は浅からぬものであった。

両者とも東京帝国大学農科大学を卒業し、山崎は一九〇一年愛知県立農林学校の初代校長として就任しており、加藤にしてみれば、「学生時代から、先輩中の知己」として畏敬する¹⁷山崎にわざわざ上京され、招かれた結果、一九一三年に農林学校の教員となり、三年に満たない農林学校教員生活のうちに教え子たちの脳裏に「山崎＝加藤」の連携を強烈に印象付けることになる。「農民の友、又、農村

青年の教育者としての加藤完治一代の仕事は、山崎先生によって開眼されたものと云つても誤りではない¹⁸と加藤の学生時代からの親友、東大名誉教授となつていた那須皓は、一九六六年に述べたし、また、卒業生であり、第九代の同校校長高木輝治は「ただ一条に農の道にまっしぐらに進まれた山崎先生と、悟りを開かれて農の実態に触れんとする加藤先生の呼吸がピッタリ合い、その魂は期せずして火を発し、安城農林の教育は愈々白熱化したのである¹⁹」と記している。別な卒業生は、「どこかお二人の間には共通点があつて、（小柄の）加藤先生は小山崎とでも呼びたい空気が生徒間に流れていた」と表現した。²⁰一九一五年に乞われて、山形県に設立される県立自治講習所の所長として加藤は赴任し、また、一九二二年にデンマークの国民高等学校をつぶさに見、体験するために、体調を崩していた加藤の外遊——加藤の深刻な胃潰瘍を友人らが心配し、西洋かぶれを嫌う加藤がその状況がなければ、国外には出なかつただろうと思われ²¹——が準備されたし、さらに一九二六年今度は夫妻によるデンマーク・ドイツ見学が準備された。その背景には、新設の「日本国民高等学校」校長、加藤にデンマーク行きを義務付けた一九二五年一二月の「日本国民高等学校協会」の設立があつたからである。すなわち、それらすべてに山崎が関わっていた。協会は、文部省・農林省で認可を受け、翌年五月に茨城県友部に国民高等学校を設立し、加藤夫妻の帰国後、学校は一九二七年二月に開校したのである。

山形県庶務課長の藤井武（一八八八—一九三〇）が「山形県立自

治講習所設置ノ議」⁽²²⁾にあるように、「自治制施行後二十年」に「自治

ニ関スル講習所ヲ設置シテ此時運ノ要求ヲ充シ、以テ（大正天皇即位の）大典ヲ記念シ奉ルハ最モ策ノ得タルモノナルヲ信ズ」として

デンマークの「農民高等学校」⁽²³⁾（ママ）を範とする県立自治講習所を作る計画を立て、一九一五年その所長に上述のように加藤がなった。

その背景には、加藤の説明によれば、藤井は「よい村には必ず立派な中心人物がい」るから、「立派な村を作るにはどうしてもその中心人物となるべき人の養成が大事だ」と考え、大学で教わった農業経済の矢作栄蔵に相談したら、矢作が弟子の那須皓に翻訳させていた

『国民高等学校と農民文化』を藤井に渡したことから、この自治講習所が生まれたという。そして、藤井の求める所長を矢作は、山崎の

了承の下で、加藤を推薦したのである。⁽²⁴⁾ 藤井が内村鑑三の弟子でも

あることから、この「国民高等学校」の導入というアイデアを、内村に帰そうとする論述等もあるが、筆者には理解できかねる。⁽²⁵⁾ 加藤

はここでも生徒とともに汗を流し、山中の農業実習地「大高根開墾地」を六五町歩も開墾している。⁽²⁶⁾ そして、ここにいる間に、那須、

山崎等を講師として招いている。⁽²⁷⁾ 県会で承認され、活動を開始した自治講習所は、所長の加藤のもと、一日に二時間ぐらひは講義をす

るということで妥協したものの、⁽²⁸⁾ 加藤は自治講習所という名の「国民高等学校」——もちろん、加藤流の——を実践していたのであり、

それゆえ、デンマークに彼が現れたとき日本で国民高等学校をやつ

ていると言いつたのである。

そして、第一回目の帰国後、デンマークの国民高等学校がいかなるものかをつぶさに眺めてきた加藤は、デンマークのそれとはことんと異なるつもかまわない、本場との差異にためらうことのない日本の「国民高等学校」を——すなわち、「の」付きではない「日本

国民高等学校」を——明確な「私立」の組織のもとでの設立に動き出した。「日本精神の鍛錬陶冶を目的と」し、⁽²⁹⁾ 農村の中心人物たる

べき者の養成指導をめざしたのである。そこでは、山崎延吉をはじめ、那須皓（東大）、石黒忠篤（農商務省）、小平権一（農商務省）、

橋本傳佐衛門（京大）といった農科大学以来の親友が⁽³⁰⁾ 結集し、日本

国民高等学校協会ができあがったのである。このように、加藤の行動には山崎がつねに周囲におり、また、加藤に決定的影響を与える

ことになった寛克彦との出会いに関しても、山崎が大いに関わっており、座談会の記録として次のような箇所が存在する。⁽³¹⁾

山崎「加藤君は最初クリスチャンになろうと思つたが、日本の

国体を考えるとクリスチャンはどうも一致せぬというので先生

非常に煩悶していたときに、私が一晚説教した。……寛克彦と

いう先生があるから、その先生の講義をきいてみるがいいと

いった。」

加藤「山崎先生に教えられて寛先生にお会いしてバッタリ考え

が変わってしまった。寛博士の教を受けてから、それから日本

人ということに目覚めたのです。」

そして、一九一三年、寛の「神ながらの道」を説く講演が農林学校で行なわれたのだった。

五

加藤完治は自身の人となりや考え方を雄弁にあらゆるこちらで講演などを通じて語っており、それは、デンマークにおいても例外ではなかった。彼は英語で講演をしたものの、滞在のある時期からは、かなりデンマーク語も理解しようである。それゆえ、私たちは、彼の行状と発言内容を上述の二つのデンマーク語の記事の中に読むことができ、安城の修養団愛知県支部の講演会に講演者として名を連ねる人々がそこに登場したのであった。すなわち、ほぼ同じときに――まずは、一九二三年に――、加藤完治なる人物を介して、二つの遠く離れた地の現象がオーバーラップするのである。キーワードは、「農民」とその「自己啓発selvoplysning」そして「国民高等学校」であった。そして同じキーワードの語句が人の口から発せられるるとき、その発言者の歴史的背景と意味するところの違いによって明らかな齟齬が生じていたとしても――その齟齬が異なる言語・思考法の外国人において生じてしまう場合――、両者はそれぞれ自らの文脈において齟齬をそのまま整合的理解として胸に収めてしまうことになる。そこに相手を認めようとする友情のような感情が絡むとき、そのポジティブな誤解が定着することになる。そうした現

象を、加藤完治に関わるデンマーク側の史料を参考にしながら眺めてみよう。

ヴィーゼルは、はじめに、「国民高等学校」の存在が、一九世紀後半からの二世代という時間にわたってその農村社会の結束や向上にいかん貢献してきたかということに関しては、デンマークでは、意見の分かれるところだと述べ、しかし国外では、とくにドイツのホルマン A. H. Holmann (一八七六一一九三六) 教授の一九〇九年の著作『デンマーク国民高等学校とそのデンマーク民族文化の発展に対する意味 Die dänische Volkshochschule und ihre Bedeutung für die Entwicklung einer völkischen Kultur in Dänemark』(――デンマーク語訳は、一九一〇年、ヴィーゼルが行なっている――) の影響によって、デンマークの農業の繁栄を第一に国民高等学校の存在のためだとして、国民高等学校に関心もたれるようになっていくと、まず分析する⁽³²⁾。ホルマンはドイツ大使館付き農業駐在官としてデンマークにかつて滞在していた。したがって、日本からデンマークの国民高等学校を訪問する人々の多くが、農業関係者であると指摘している⁽³³⁾。これは逆に言えば、わが国で国民高等学校への関心が語られるとき、農民・農村の「文化的」向上を求める文脈以外には語られてこなかったことと対を成す現象である。「北海道からの出納陽一ら二名を挙げた後で」第三の日本人男性、加藤完治が二月になつて突然現れ、しばらくここにどまりたいと言ひ、山形の国民高等学校の校長であると自己紹介してきたとき、我々は、また、彼

にも農業と農民に対する尋常ならざる関心があることに気づいた。彼にとつては、たとえば、農業の發展と国民高等学校の間に實際の關係を見出すことが重要な役割であつた。或る男が——それも専門家ではない人物が——、酪農共同組合の出現には、国民高等学校の存在がその理由ではなく、それは必然であつた、と云うことを聞いたとき、加藤が何回も繰り返してそのことに関し質問していたことを私は今でもよく覚えてゐる。そして、彼は具体的な農業問題に關し多大な関心を示していた。それゆゑ、彼が語る（日本の）国民高等学校なるものが、国民高等学校という名を持つ一種の農業学校ではないのかと直ちに我々が自問してしまふことが、それほどおかしなことではないのだ。加藤が我々に彼自身のことだとか彼の学校のことだとかを説明したものは、それら自身がすなわち、我々の考えている国民高等学校とは違うものだ⁽³⁴⁾と告げているのである」と、ヴィーブルは記している。

實際、ここで問題となるのは、ドイツ留学中にホルマンの著作を知つた農科大学教授、矢作栄蔵が、帰国後弟子の那須皓にそれを翻訳させるのだが、その邦題が『国民高等学校と農民文明』（一九一三年）となつており、上記の原題にある「デンマーク国民高等学校」から「デンマーク」を削除し、「デンマーク民族文化の發展に対する意味」の語句が単に「農民文明」と変わつてしまふ。いわば特殊デンマークの性格が薄れ、本場⁽³⁵⁾で展開された国民高等学校の、デンマークにこそ生じた歴史的文脈が読者の印象から薄れてしまふ現象

が、わが国では現れたのである⁽³⁵⁾。その翻訳の二年後、藤井武が「国民高等学校」——彼の表現では、前述のようになんと「農民高等学校」と記すのだが——をモデルに山形県自治講習所を設立したのであり、そこに農民教育への関心に満ちた加藤が所長として赴任するのであるから、国民高等学校が「農民のための学校」ではないと言ふ文脈こそ、わが国には存在しなかつたのである。

また、ヴィーブルの手記には、加藤の若き日の人生経験を紹介し、「ラテンスクール」（金沢の四高）に通つてゐる際に、母・祖母の死を体験、アメリカ人の女性宣教師の影響でキリスト教徒になり、洗礼を受けたこと、数年してその熱が冷めて、社会主義やトルストイの著作の影響を加藤が受けたことについて語られてゐる。続けて、次のように記されている。「彼は新たな静穩への到達を東京大学の算教授によつて導かれた。近年、算の思想とその著作が加藤に大きな影響を与えているのだ。加藤の宗教的立場は今まさに彼がキリスト教における最善のものとみなすものを維持しつつ、それを彼が彼自身の民族において見出すことのできる価値のある、奪い去ることのできないものに結び付けているのである。それはすなわち、算教授がその理解へと彼を導いたところのものであり、それは加藤が（山形の）国民高等学校を引き受ける以前のことであつた⁽³⁶⁾。こうした説明から、加藤が西洋的精神文化に理解をもち、デンマーク人側にとつては彼が語る神概念に——それも日本人精神が語られる際も——西洋思想における神概念とがオーバーラップし、それらを同一

視して理解していたように見受けられるところがある。

「それゆえ、加藤はまた若き日のグロントヴィが北欧の古代にこだわったことに対し非常な興味を示した。そこで、私は幾度もの長い会話の中で、グロントヴィのこの点に関する立場とか、また、デンマーク人に対する、しかも「純粋に」デンマーク的なるものに対するグロントヴィの考え方とかの説明を、加藤に対し試みなければならなかった。多くのほかの日本人とは対照的に——彼らは祖国に對しとても遠慮がちに発言し、つまり誉めたりなどしないのであるが——、加藤はまた、最良の日本人の資質、たとえば先祖に対する大いなる敬愛の念とそれに緊密に連なっているという情念、自己滅却の意志、そして先祖や祖国とともに在るとする心情の存在といった、彼の考えるところを極めて積極的に語ろうとしたのであった。加藤によれば、純粋に日本的なるもの——「眞正の日本人精神」——に「弥栄 (Yasaka)」なる言葉のうち存在するものが属しているのである（——前頁において、山形の国民高等学校（自治講習所）における、「弥栄」と唱える神棚への早朝の祈禱が紹介されている——筆者註——）。それは、力やエネルギーがそこから生ずる、精神における複合を表すものなのである。「弥栄」とは、生長することそのものであり、そこから発する根源的なるものが「弥栄」のイメージであり、中央から四方に放射状に輝きたる扇の要のようなものなのである。

生徒らに強い道徳的影響力を行使することは、加藤の意志であり、

「日本のデンマーク」安城に見る我が国の海外文化の受容に関する一考察

彼にはその能力が確かに備わっている。また、彼は生徒たちに祖国への愛情を持つように教えている。祖国という文脈において彼は少なくとも民族を理解し、彼は日本民族すべてに對し「生きた参加」を呼びかけているのである⁽³⁷⁾。

「彼がデンマークの状況を知らたいと意図し、コル、さらにはとりわけグロントヴィを知りたいとした意欲と、その真剣さから判断するならば——それらが十分に徹底的に彼に理解されたとは思われないもの——、また、デンマーク中を旅行し、指導的人物を次々に訪れて会話して歩いた彼の情熱から判断するならば、このデンマークでの彼の長い滞在は、日本における今後の更なる国民高等学校思想の発展に意味がなくてはならないだろう。

日本の若者たちが、加藤が確信を持って抱いたものを有効に使っていくことになるだろう。たとえば、ヨーロッパに住む我々の感性が捉える問題やら困難が、（地球の）あちら側の人間がどの程度までおなじに問題を捉えるのだろうかという点において——たとえ加藤の個人的な思想的発展が数ある証拠のうちのひとつではあったとしても——、日本人とデンマーク人のあいだに差異があるように、日本とデンマークのそれぞれの国民高等学校のあいだに疑いなく存在する差異をあれこれ思案することは可能である。加藤がその宗教的真剣さとその開放的性格をもち、さらに自民族に対する愛情を持ち続ける「国民高等学校人^{ハイムスコレマン}」であることに私は何の疑念も持ち合わさない。

彼らが設定した人類全体の成長といった目標に向け若者に対する訓育に勤しむ彼らにとつて、この地上にいかなる活動の場がいつたに存在するのだろうか。地の果てにまで達し、その目標を目指す活動を促し、助長するようなそういった活動の幅はグロントヴィの考えには存在しない。しかし、我々デンマーク人にとつてそのように想いを馳せることは、悪い気がしない。それはひとえに国民高等学校思想のみでなく、「弥栄」であれと呼びかけるにふさわしい人々に対するグロントヴィ思想の別なあり方が現れているといえよう」³⁸。

以上引用が大変長くなつてしまつたが、ヴィーズルは加藤完治の言う「国民高等学校」が、自分たちのものとは違うことを認めたくえて、それでも加藤の情熱を認めて別な形の「国民高等学校」の存在を肯定しているのである。

六

また、当時、コペンハーゲン国民高等学校協会の専従であつたE・J・ボーロブの一九二七年の四週にわたる手記では、加藤の考え方がより具体的に記されている。たとえば、寛との関係およびその思想性の説明において、加藤のグロントヴィ理解は、興味深い。国外事象を理解する際の、我々が行ない易いアナロジーの方法とは、斯くあるのかという見本のようでもある。

「そこで、彼（加藤）の人生の大きな転機が到来した。東大教授で

ある哲学者、寛は、宗教と人間に関する問題を深く思索し、とりわけヨーロッパ思想に関する大きな著書を著しており、その彼が（立農林）学校を訪れ、日本人の信仰と民族の在り方、祖国愛、国民的文化について彼を捉えて放さない講演をしたのだつた。『そのとき、私は初めて『生きた言葉 (det levende Ord)』を聞いた』と加藤は言った。加藤は（デンマークで行なつた）講演の中で次のように言っている。『寛は、彼の人格すべてにおいて、私に強くグロントヴィを想起させた。寛はグロントヴィと同様、広い視野を持ち、民族とはその民族の生命を養いうる固有の土壤に深い根を持つべきものであり、その民族の生命は自らのみでなく全人類 (hele Menschhed) をも豊かにするものである、という理解を示している。真正の日本に民族的共生を呼び寛まそうとする彼の強い言葉は、それを忘れることができないほどに強く私を捉えたのである。これによつて私は日本に貢献するばかりでなく、地上のすべての民族（人々）と共生し、そして神にむかつて高みにひたすらわれわれを引き上げていこうと、私は理解したのである。自らの民族に対する信頼があるならば、民族なるものはキリスト教の真正の精神にのみ成就するのである、と寛が言うとき、それはグロントヴィが言うところと同じではないでしょうか』と。——多分、加藤はこのグロントヴィとの比較をデンマーク人聴衆に対して寛の意味するところを伝えるのに、若干わかりやすく変えたうえで行なつたのであろう。また、譬えられた際に、多少、類似点が強調されすぎたところがあつ

たであろうと思われる。もちろん、明らかにグロントヴィと寛のあいだには大きな差異が存在している⁽³⁹⁾。この引用文の中の「生きた言葉」とはグロントヴィの用いた表現であり、自らの体験をデンマーク人に説明しようとして加藤は積極的にアナロジーの中に身を置くうとしていたといえよう。

「寛は加藤を個人主義から解き放ち、加藤はその後、(先祖)代々」のみならず人類全般に及ぶ共生(「一心同体」という語の意味するところを見るようになっていった。これについて彼は次のように語った。「私はそれまで、目に覆いをつけた牽き馬のようであり、私の考えはぐるぐるとおなじ轍の上を回るばかりであった。ところがいまや、人の義務は自らのために働くばかりでなく、妻や子のためにもそうすべきであると突然に理解した。」「一心同体」が、真実である(Fælleskab eller Sandhed)。まずは家族とともに、そして農村とともに、次はすべての我が民族とともに、そしてすべての人類とともに」と。彼は過去と未来をつなぐ生きた関係を感じし、また、すべての人間が神の子であると感じた。「われわれは「一心同体」を通して隣人愛を實踐し、神に通ずる道を発見することになるだろう」と(加藤は語った)。——数年後、彼は再婚をした⁽⁴⁰⁾。加藤の寛によって導かれた日本人精神の「発見」を、「受持分担・一心同体」という表現に連なると考えられる日本民族総体の「一心同体」への自覚という解釈を、デンマーク語の Fælleskab といふ語で表すとき、「日本精神」でいうところの「神の子」が、明らかにここではキ

リスト教的解釈の「神の子」とデンマーク人には受け止められよう。加藤が自叙伝で書いている「寛克彦先生の講演をきいて、皇国日本精神の表現を、目の当たり見聞して、たちまち純日本人としてよみがえり……」⁽⁴²⁾というような状況をどれだけのデンマーク人が正しく解釈できたであろうか。

加藤は一九一三—一四年に那須皓が翻訳したホルマンの本を読み、国民高等学校思想に強く影響を受けた。「その本の中に彼はそれまでぼんやりと夢想していたことが、何某か表現されていることを発見した。デンマーク国民高等学校は実践的に生きている人々の学校であり、それは人間の発展へと彼らを引き上げる手助けをし、人々を国民的(民族的)で、庶民的である共生(「一心同体」)に導くものであった。そこへ、日本の東北地方の山形で、藤井武がホルマンの本を読んでいて、国民高等学校の考えに影響を受け、山形に国民高等学校を建てることを決意した。(それがその校長に、加藤が選ばれていく流れにつながる)⁽⁴³⁾」「最終的に加藤は、その学校が公立学校システムから独立すべきであるということを条件として掲げたうえで、校長になることにした。それはすべてが叶うということにはならなかったが、その学校を『自治を行なう講習所 eller selvstyrende Institutt』と呼ぶことで、望んだとおりの教育を配する、という自由を持つ特別な位置にいたることになった。学校には耕すべき約百ヘクタールの土地が備えられた。加藤以外の農業専門家は、学校には関係せず、『非常に厳しいタイプのヒース開墾のよう』であった。し

かし、加藤は校長を引き受けた⁽⁴⁴⁾とポーロプはつなげる。事實は、藤井の発案時にすでに「自治講習所」という名称となっており、それは講習所が「自治を行なう場」であることを示していないことは、周知の事實であり、また、高地の開墾地、大高根農場が、まさにデンマークを意識しての「ヒース開墾」に譬えられていることは、日本の事情を知らない読者を意識した表現であることがわかる。

「加藤はつねに民族に対するグロントヴィの見方を尋ねていた。ラテン語教育的教養に対するグロントヴィの戦いに、古典的、中国起源の文化に対する近代日本の姿勢と通ずるものを加藤は見いだしていた。『中国は我々のローマであるが、我々は北欧のように我々独自の神話を持ち、我々は独自の古来の文化を立ち上げねばならぬ』と、彼は言う。——ある講演で、彼はすべてのデンマーク人はデンマークを担わねばならないと語っている。そしてデンマークなるものは我々の肩を被う外からの重荷ではなく、我らの心の中に生きているものなのである。『デンマークとは今生きているあなた方にとってのものばかりではなく、過去に生きた世代、また、これから先に生きていく世代のものでもある。今、心のなかにデンマークを担っていくべき者こそが、あなた方なのである！』そのようにグロントヴィが言っており、そのように私は日本についても語っているのである。また、私の学校では、日本人の民族として続いてきたものへの愛情を呼び覚ますために、そして世界中の兄弟姉妹との一心同体をめざして、我々は日本民族の心のうちに日本を担っていかう

とするのである。』

引用を通しては加藤の燃えるような国民高等学校思想に対する情熱や、日本におけるその試みに対する彼の意欲といった実際の印象を伝えることは不可能である。——しかし、これらの行為や人格的に大きな資質ということで、彼がまさにそれにふさわしい人物であることは、疑いをえない。彼が長年の経歴を語り、そして『私の学校は私の命である (Min Skole er mit Liv)』と語るとき、それは決して口からでまかせではないのだ。国民高等学校思想を徹底的に理解しようと試みる彼のエネルギーは、彼が真剣に物事に対し全精力を込めるであろうことを示している。大いなるこの課題にひとり手を広げることが彼にできるのだろうかという不安とか、また同時に国民高等学校の考えがいかなる土地にあつても正当で、実行できるものであるという確証とか、彼の学校を通して、彼の民族ばかりでなく全人類、さらには我々すべての者の上にいる神に対して彼が貢献するであろうという確信とか、あれこれのことを思わせながら、大いなる希望を抱いて彼は故国に帰っていった。——彼とかわかりを持つことになった我々は、温かい心と、俗物根性とはまったく無縁の視点を持つ、小柄ながらも情熱的で真剣なこの男が好きになつてしまった。(今後も)興味深く彼の試みを追っていきたいと思うし、彼が投函することを約束した彼の学校活動に関する報告の手紙を持つことにしよう。…… ————あらゆる差異や困難を乗り越えて——、グロントヴィとコルの肖像を持ち帰ったように、彼がこの二人の教

育思想をも持ち帰ることに成功するよう祈っている。⁽⁴⁵⁾

以上が、ポーロップの手記の最終箇所である。

七

国民高等学校の教育における農業教育の重視と徳育的精神性を強調する加藤に対し、それは違うのだとポーロップは言いながらも、「まずは日本およびデンマークの国民高等学校が活動する背景の大きな差異を理解しなければならぬし、次には、実践的教育を目的とすると同時に、生徒に対する教師の人格的影響力・精神的徳育というものを、彼がもつとも大事なものとして理解しなければならぬ⁽⁴⁶⁾」とデンマーク人の読者に語っている。そして、加藤による「われわれの行なっていることは様式は違っているけれども、精神は同じである」という言葉を掲載することで、「彼の多くの言説は、彼がホイスコーレの真髓を確かに捉えているということを示している⁽⁴⁷⁾」とエールを送ることを忘れなかった。また、すでに見たようにヴィーゾルの記事の中に加藤の立場を尊重するように「Yasaka」なる言葉が何回も現れ、また、加藤の帰国後に届いたポーロップの近況を告げる書簡の最後には——「加藤完治全集」への収録時にすでに日本語に翻訳されているとはいえ、——あきらかに「Yasaka」なる語がポーロップ自身によって使用されていることがわかる。「僕および家族一同、また僕の妻よりも、貴兄及びご令閨に対し謹んで弥栄

を祈り奉る」と結ばれている。⁽⁴⁸⁾その表現は、加藤とかわりを持つ

たデンマーク人らが、加藤を受け入れていた証拠である——小農学校校長ヤコブ・ランゲ Jakob E. Lange⁽⁴⁹⁾（一八六四—一九四一）は除くとして。しかし、その語が、日本の国民高等学校教育およびそれに引き続く満蒙開拓のキーワードであり、ちなみに、満州への第一次農業移民団の入植地のひとつは「弥栄村」と名乗ったのであった。実践にこだわる農業者育成という考えのもと、農家の次、三男以下の者たちや貧農出身者の耕すべき農地を確保しようという問題に直面したとき、加藤をはじめとする日本の国民高等学校人がその土地を海外に求めていく選択肢は、大陸への侵出を国是とした時代の流れからいってそれほど突飛なものではなかったはずである。ただし、それをデンマークのホイスコーレマンらが想像しえたとは思わない。

第二次世界大戦のさなかの一九四四年、デンマークの国民高等学校が百周年を迎えた。その際「国外の国民高等学校」という手記を記念誌に添えたポーロップは、加藤を日本の国民高等学校運動の第一人者と位置付け、一九二六年から三五年のあいだに百名ほどの日本人が加藤とのかかわりでデンマークおよびその国民高等学校を訪れていると説明したうえで、「本物の国民高等学校運動が日本では展開しているように見えていたが、この近年の不穏な状況下に日本からデンマークへの訪問者は途絶し、日本の国民高等学校の現況に関する情報はなくなっている」と記している。⁽⁵⁰⁾ポーロップが紹介する友部の国民高等学校が、おなじ茨城県の内原に移転し、数え年一六か

ら一九歳の少年らに対する滿蒙開拓青少年義勇軍訓練所が一九三八年に併設されていったことは、⁽⁵¹⁾デンマークに伝わっていなかったようである。

加藤完治が生徒に道徳的影響を与え、「国民高等学校」という「学校」の形式において国家に貢献すべき若者を教育しようとしていることに、デンマーク人側は注目した。デンマーク人にとっては、加藤は「グロントヴィイではなく」特にコルが創出した様式において国民高等学校思想を理解した「人物と把握され、それゆえ、加藤は国民高等学校を創設して直ちに百名もの生徒を集めてしまうような「若者教育の改革者」であると映じた。⁽⁵²⁾また、グロントヴィイの考え方を寛克彦の思想を敷衍する形で理解していたのであるから、いくら説明してもなかなかデンマーク人側が納得できるような理解を示さなかつた加藤であつたが、国民高等学校の実践者であり苦勞人であるコルに対し並外れた関心と共感を加藤が示したことに、デンマーク人側が驚いていたことは、興味深い。一方、加藤のコルへの評価がグロントヴィイと並ぶほどであるということ——そう表現しないと、デンマーク人読者が納得しなかつたであろうから——、いや、むしろグロントヴィイより高かつたのであつたが、それは「本場」のデンマーク人にとってはいささか不可思議な現象として映つたようだ。⁽⁵³⁾とくに加藤が帰国を前にして、グロントヴィイとコルの肖像画両方を欲しがつたものの、コルのそれは入手できずにいたところをポーロプらがコルの写真を引き伸ばして壁掛け用の大きな肖像を作つて贈

呈した際の、加藤の喜び様は今でも忘れられないとポーロプは一九二七年に記している。⁽⁵⁴⁾加藤をはじめ、国民高等学校に関心を寄せる日本人によるコルに対する高い評価は、那須皓の「国民高等学校と農民文化」の影響であつた。すなわち、わが国の実践的国民高等学校運動においては、「構想者」グロントヴィイに対して、定型化した彼の伝記的経歴の記述以上に踏み込んで言及されなかつたように思われるし、実際、グロントヴィイの思想がわが国で十分に語られてきたかということに関しては、きわめて心許ない。加藤によつて「大の丁抹好き」(『訪欧所感』九三頁)と言われた出納陽一らが、「崇高なる農業精神」とグロントヴィイの人格とを結びつけるという紹介の仕方、わが国のグロントヴィイ像が成立していった。そこでは、「今を距る八十年前、丁抹国民が未曾有の危機に際会するや、猛然たるグロントウイッヒの獅子吼、忽ち全国民を激励し、緩急事に応ずるの意気を祖国興復の一点に集中し、……自由創造と農業改善の途に精進せしめ、遂に燦然たる北歐文化の光輝を發揮して、今日の盛運を開くに至れるは、実に其の提唱に係る国民高等学校教育の賜物に外ならない」(『丁抹に於ける農村の更生と教育』一頁)といった偉人伝風の語り口と、「国難—偉人グロントヴィイの出現—国民高等学校—農業の繁栄—国家繁栄」が語られるのであつた。⁽⁵⁵⁾それゆえ、このステレオタイプが、ずーっと後年になつても朝日新聞紙上の「松前重義が語るわが昭和史」(一九八六年)に凝縮されている。「一八六四年の敗北で」国民は将来への希望を失い、国家滅亡の危機に陥つ

た。このとき国を救ったのが八十一歳のグルントヴィヒだった」とし、そのなかの「メモ」欄には、グルントヴィヒが「地主に農地を解放させて酪農を振興、高度農業国家としてのデンマークの基礎を固めた」とあり、あたかもグルントヴィヒが、デンマークに近代農業の繁栄をもたらした人物として描かれるのであった。⁽⁵⁶⁾

一方、篤き信仰のもと、逆境を乗り越え、貧しくも生徒と共に汗を流して学校を建て、寝起きをも共にし、自らの信念に向かうコルの徳育的でもある清貧生活によって、「先生」的人格者と彼を慕って付き従う同士の若者の集団といった「コルによる国民高等学校」を、それまでの日本にあった松下村塾・慶応義塾といった「私塾」のイメージで藤井にしても加藤にしても解釈したのである。この私塾風の理解こそ、一九二三年にデンマークに現れて、加藤がすでに「国民高等学校」を故国でやっていると主張する根拠であり、また、山崎延吉が自ら展開する鈴鹿の農場「我農園」^(がのうえん)を一九二九年に「農村子弟教育道場」として「神風義塾」と名づけて、運営していくことと無縁ではなからう。⁽⁵⁷⁾そして、一回目のデンマークからの帰国後、駒場の農科大学での加藤の講演に際して、講演を知らずべく準備された看板には、「日本のクリステン・コル、加藤完治氏来たる」とあり、⁽⁵⁸⁾加藤自らがクリステン・コルに譬えられることを拒絶しなかったのである。デンマーク人を驚かせた加藤のコルへの傾倒ぶりは、正義感が強く道徳的潔癖を旨とする加藤にあつては、グルントヴィヒの三度の結婚——ことに最後の結婚が妻と年齢を著しく異にするも

のであっただけに——によって、グルントヴィヒへの不信感が募っていたことも事実であった。⁽⁵⁹⁾実際、加藤はデンマーク人一般の持つ結婚観・家族観を嫌悪していたし、⁽⁶⁰⁾「丁抹謳歌者」に自らがなることを警戒していた。

八

以上のことを踏まえて、前述の一九二三年夏の碧海郡で開かれた「農村文化講習会」の図式を検討してみよう。

稲垣が言うように、その意図は「夏期体現大学」の実施であり、農業技術などといった実践的なことからではなく、農民の教養・人格形成に寄与すべき「農村文化」形成といういわば抽象的な講習会の試みなのである。日本風国民高等学校が、農業を生業にと志す「生徒」に対しそれなりの年限の「就学」期間を持つものイメージされているのに対し、「本場」デンマークのホイスコーレが、あくまでも季節的ターム（結果として対象が農村青年となるから農閑期）で寄宿制の「学校」と名乗る建物——我々のイメージする運動場付き校舎でなく、農家の建物であつたりする——で、集う者の教養・人格形成に寄与すべきものとして構想されていたことを考えれば、期間が短すぎるとはいえ、皮肉にも、この夏期体現大学こそホイスコーレの真髓が展開されていたといえよう。実際、ホイスコーレ højskole が（ドイツ語 Hochschule でも）人文主義的なラテン語教

育的意味合いとは無縁の「大学」をさす語であるのであるから、稲垣の使用した「大学」なる表現もこのことに符合する。もちろん、それを承知で稲垣が言葉を選んで準備したとは言えないだろうが、講師陣に山崎支部長をはじめ、いわゆる「農本主義者」と表現される矢作・那須といったデンマークを知る面々の存在があり、さらにそれにデンマーク体操という組み合わせが存在する。すなわち、この農村文化講習会の根底には、何某かの「デンマーク」を意識したものが無いとは言えなかつたであろう。

そして、山崎延吉が、一九二六年の『農政研究』の「日本の丁抹号」で、主幹の古瀬傳蔵によつて「日本のグルントキツヒ」と譬えられたことは注目⁽⁶¹⁾に値する。古瀬は概況をつぎのように語る。碧海郡は、矢作川に沿つた一帯以外は「天恵の地」ではなく、「居住者の多くが先祖代々その居住者でなく他府県或は他郡からの移住者の多いために、人の和と云うことが容易に出来得べきものでない」が、「共同動作の頗る困難なるべきものであるのに、之は又其正反対に他に見る事の出来ない人の和を得て組合事業の発展して居ることは以て珍とし奇とするに足るものである」⁽⁶²⁾。「即ち僅かの期間に於て本郡が理想的農村として天下に知られるに至つた事に就ては、必ず其活動力となり中心となつた人物のあるべき事を忘れてはならぬ。彼の丁抹が北欧の一小国であり乍ら、今日世界の天国とまで称せられるに至つたのは、一つに国民高等学校創立の殊勲者グルントキツヒ氏のあつた為である」⁽⁶³⁾。「丁抹の青年教育に大なる貢献を致し、国民

高等学校を創設し、其卒業生の力によつて、偉人グルントキツヒの理想が全丁抹に普及され、今日の隆盛を見るに至つたのである。之と同様に愛知県碧海郡が、日本の丁抹とまで謳歌されるに至つた抑もの原動力となつたものは、丁抹に於ける中心人物であつたグルントキツヒに匹敵すべき我農生、山崎延吉先生が中心の原動力となつてゐる事は何人も之を容易に肯定し得る處である」⁽⁶⁴⁾。その山崎が、二八歳のときに、新設の県立農林学校に初代校長として迎えられ、「先生は苟も農業教育の精神と農業教育者の使命は、教育を門外に出し、農民全体の教育を施すべきものであるとの主張の下に、着々此の理想の実現に努力せられ、校門から年々幾多の青年を送り出すと共に、一面に於ては其父兄の教育につとめ、内外呼応して奮闘せられた」。「なんと云つても碧海を日本の丁抹たらしめた大原動力は、大山崎先生の教育の力なりと最も率直に断定するに躊躇しないものである。試みに現在郡内に於ける各種機関の首脳者として牛耳を採つて居る人とは何れも卅前後の血氣盛りの青年諸君である事は、本郡を一度視察した人達の最も鋭敏に感ずる点である。而して夫等の中枢人物は何れも小山崎……二世の山崎を以つて自ら任じて居る一事は、如何に山崎先生の教化が青年の上⁽⁶⁵⁾に及んで居るかを知らぬ事が出来

外側から觀察するもの⁽⁶⁵⁾に上記のように言わしめた山崎とその地域社会とのかかわりは、一九二〇年に校長をはじめとする公職を辞した後も深く、容貌魁偉から来るカリスマ性と、働き盛りの教え子た

ちの存在とが碧海郡住民に独特の活気を与え続けたのである。わが国では那須皓の「国民高等学校と農村文化」以来のデンマーク観である。近代農業の祖グロントヴィー国民高等学校—デンマーク農村の繁栄」という図式に、優れた農業指導者の存在—その地域への影響力をもつ県立農林学校という教育の場—卒業生による農村社会の活性化」という図式が、当時の第三者の目にオーバーラップしても、何の不思議も無かつたのではないだろうか。そこにおいては、グロントヴィーが本来何を言い、いかなる人物であったのかは、まるで問題にならなかつたし、グロントヴィーを「国民高等学校の創始者—農業の発展—農村の文化的繁栄」の図式の中で捉えていけば絶対視した。また、実践においては、クレステン・コルに「始まる」私塾的国民高等学校をモデルとした。山崎をグロントヴィーに譬え、加藤をコルに譬えたことは、それぞれ文脈的には異なるものの、ほとんど同時にそれらの譬えがわが国で現れたことは、注目すべきである。そして、グロントヴィーとコルの日本的解釈上の「セット」が、県立農林学校卒業生によって強烈に記憶されている「山崎II加藤」コンビにそれぞれ別個に当てはめられたところが興味深い。すなわち、安城に住居を持つとはいえ、一九二三年頃から日本全国に「興村行脚」という講演活動を行ない、農村振興の道を説き、弟子の稲垣稔とともに「全村学校運動」を一九二四年から本格的に開始した山崎延吉に対し、加藤完治は山形に、そして後には茨城県友部に活動の拠点をもち、彼の「国民高等学校」を運営することで別の道を行

だようにみえるが、山崎の日記には加藤が両者に関わる行動の節目には必ず登場し、山崎は友部の「日本国民高等学校」開設に関わる協会にも理事として名を連ねているのである。⁽⁶⁷⁾

デンマークで小農学校や「自由学校」^{フリイスコール}を実地に見てきた加藤が——二度目のデンマーク訪問の理由を、加藤は「自由学校」^{フリイスコール}を見忘れていたのでと、デンマーク人に告げている——、自らの見た実態としてのホイスコールではない日本の「国民高等学校」を志し、学校運営という積極的な「日本のコル」を演じているときに、「興村行脚」で日本の各地で講演を続ける「日本のグロントヴィー」山崎には変質が生じる。彼のいわば観念の世界でしかなかったデンマーク像が、「デンマーク研究者」平林廣人（一八八六—一九八八）の出現で、変わらざるをえなくなるのである。

平林は一九一七年夏に木崎湖畔の木崎夏期大学を始めており、一九二四年春にボーイ・スカウト大会への参加のためデンマークに渡り、一年半にわたって滞在、その間ヴァレキレの国民高等学校を訪れたりした。一九二七年のボーロプの手記の第一週二ページ目に彼に関する特別な情報はないものの、彼のペン書きの漢字署名が掲載されている。この平林が、一九二五年秋に帰国し、農村文化協会の理事になり、「おそらくは農村文化協会の仕事をつうじて帝国農会幹事であった山崎延吉と知り合う。そして、彼が、弟子の稲垣稔とおこなっていた『全村学校』の運動に参加を要請される。そこで平林は、全国の農民の前でデンマークについて講演をおこなった」⁽⁶⁹⁾。実

際、平林は、山崎と同行して各地でデンマークの農村事情を紹介する映画を上映したり、講演を行ない、具体的なデンマーク農村事情を披瀝した。とくに、豊かな農家にあつては、ピアノを所有し、中級以下であつてもオルガンを持つといった具合に、きわめて即物的で、俗物根性を露にしたプラグマティックなデンマーク農村のイメージを伝えたのである。⁽⁷⁰⁾

そして、山崎の講演内容にも、変化が現れる。「又丁抹農民の如何に余裕ある生活をして居るかの一例を挙げて見んか。丁抹の農家は普通一万円以上もするピアノを持ってゐる。吾が国では高等女学校位に精々四十余円位（ママ）のものを備え付けてゐるに過ぎなく、個人の家で持つてゐるのは非常に少数であらうと思はるるに、丁抹の農家は全部これを持つてゐるとは、如何に生活程度が高いかが察せられる」と、山崎自身が述べるようになっていく。このように平林の参加によつて、自らも他人によつて「日本のグルントキツヒ」に譬えられることに甘んじていた観念的なデンマークのイメージが、山崎においても消滅していったのである。山崎をグロントヴィ、加藤をコル、そして碧海郡を「日本のデンマーク」と譬える時期は過ぎ去り、神谷が指摘するように「デンマークに似ていないことを自覚する」ことで「日本デンマーク」なる名称を採らねばならない時期が到来していたのである。まさに山崎の記した一九二六年の表現と、二九年の表現の中に明確な差異が存在していることがわかる。「近來、大阪や名古屋や東都の新聞で、日本の丁抹なりと、いやに持

ち上げて宣伝されつゝあるが、愛知県は三河の国の碧海郡である。ほめられて悪い気持のせぬは、人間共通の心理であるが、然し何ん⁽⁷¹⁾だか、くすぐつたい気持がするだろうと思はるゝが、碧海郡の農民である。」から、「私の居郡愛知碧海郡が日本丁抹と称せられて居り、私は『碧海郡が日本丁抹の称ある所以』と言ふ題でこの碧海郡の農業に就いてお話することになつて居りますから……」⁽⁷²⁾というように変化している。それらは背景となる物理的状況も時間的状況も異なるとはいえ、そういった流れの中で、「の」無しの「日本デンマーク」の表現が現実化していったのである。

すなわち、平林廣人は一九二三年の碧海郡に対する「日本のデンマーク」のはじめての呼称の成立には関わつてはおらず、そうした時間状況の整理と発言内容の吟味が、必要なのである。このように考へるとき、筆まめで手紙をよく書くこと⁽⁷⁴⁾で知られていた加藤完治が、当然デンマークに在つて山崎に何度かの手紙を一九二三年中に書いていのであると想像することは可能であろう。そして、山崎が加藤を思い、デンマークを話題にして第三者である新聞記者か誰かを前に語つた、いや、つぶやいたかもしれない。そして、その第三者が、碧海郡で展開している農村文化講習会などについて聞いた⁽⁷⁵⁾り、目にしたりしながら、「日本のデンマーク」とか「日本におけるデンマーク」といったフレーズを思い浮かべ、新聞等の活字にその表現を使つたということ⁽⁷⁶⁾はありえないことではないのではないか。

* * * * *

以上見てきたように、そこには、外国文化を受容する際にしばしば見受けられるおざなりの現象とは、いささか異なる特有な現象が横たわっていることがわかる。それは、国外状況の単純な模倣でもなく、文脈の異なる国外的状況のハイブリッド的な受け入れでもなく、それなりの国内的文脈で自己完結して成立すべきものが存在している、ということなのかもしれない。すなわち、それは国外の類似した流れに——それがもともとの発想のヒントでもありうるのだが——一瞬晒すことで、むしろ国内的状況をいつそう正当化するという現象である。それは、「日本デンマーク」にせよ「日本国民高等学校」⁽⁷⁵⁾にせよ、名称は模倣から始まっているのは明らかであるものの、「日本の」と「の」付きでそれらを意識的に呼ばなくなった時点で、彼我の逆転現象が始まり、「本家は我にあり」ということになのである。それは「舶来崇拜」的国内土壤の中で、国外の現象をモデルとして取り入れているように見せつつ、結果としてそのことが権威付けとなって現れている。しかし、それを行なう人物らは、けっして「丁抹謳歌者」といった外国礼賛者ではなく、特殊な時代的狀況下にあつて確固とした意識を持った「日本人」なのである。それゆえ、外国にあつて国外的状況に触れたとしても、本来持っていた自らの価値判断はほとんど揺らぐことなく、保持され、それでも若干の国外の様式を加味して、それを持ち帰ることでその権威は

さらに確固たるものになるのである。たとえば、「加藤はいつもここデンマークでは皆と一緒に（国民高等学校等の集会での唱歌を）歌っていたが、彼の学校において唱歌を同様の方法や同様の状況で利用するのかということに関しては、（加藤は）いまだはつきりとは言っていない。『それは、考えてみよう』と、彼は言っている。」⁽⁷⁶⁾というポーロプの表現に対しては、加藤の数年後の次の言葉が対応する。「其の以外の事に就いても、丁抹で実施して居る唱歌の如きは必要であるから、大和民族の意気を涵養する様な唱歌はなるべく之を集め、事ある毎に之を合唱したい。其れから体操の如きも必要と思ひます。併し自分は体操のみでは満足しないで日本古来の武道を加へたい。」⁽⁷⁷⁾

本論は、なぜ安城を含めた碧海郡が「日本のデンマーク」と呼ばれるようになったのかという意味では、それ自体微妙な状況証拠しか提示していないということになるが、初めて「日本のデンマーク」なる言葉が現れたとされる一九二三年に、デンマーク的状況と日本の状況をデンマークにおいてオーバーラップさせた人物が存在したことを指摘し、そしてその人物に関わる現象について考察してきた。以上のことを述べることによって、いままで言及されることの無かった興味深い歴史的状況が多少は見えてきたと言えなくはないだろうか。

註

- (1) 内村鑑三とデンマークに関しては、拙稿「デンマルク国の話」と我が国のデンマーク像の変遷」『歴史と地理』(山川出版社、一九八八年一月)、三三九号、一一一五頁を参照せよ。また、安城市歴史博物館発行の二〇〇五年特別展の図録に掲載された拙稿「北欧デンマークの輝き」を主体として第一章には、デンマークと日本との関わり概観、「日本のデンマーク」を筆者が知った経緯などを記した(その執筆時には、「日本のデンマーク」と「日本デンマーク」の区別を意識はしていなかった。また、カナ表記「デンマーク」と漢字表記「丁抹」に関しては、それぞれの使用時の慣習であつて、カナが漢字かには、意味上こだわらなくてもよさそうである)。
- (2) 岡田洋司氏の著書・論文には、本稿作成上、碧海郡・安城における歴史的展開に関する必要な知識の形成・概念化にこの上ない参考とさせていた。謝意を表したい。著書は、『ある農村振興の軌跡——日本デンマーク』に生きた人びと』(農山漁村文化協会、一九九二年)、『大正デモクラシー下の地域振興——愛知県碧海郡における非政治・社会運動的改革構想の展開(不二出版、一九九九年)であり、多数の論文は、以下引用箇所を記す。
- (3) 天野暢保『安城ヶ原の歴史』(安城市農業協同組合、一九九〇年)、九〇頁。天野は引用に際して「日本デンマーク」と記したが、原文では筆者が想像するように上野操は「日本のデンマーク」との「付きで記している。本情報は、第二校修正時に、安城市歴史博物館学芸員齋藤弘之氏に問い合わせた際に判明、また同氏により『安城農報』第二四号の発行年は、天野の記載した一九二四年ではなく、一九二五年であると指摘された。齋藤氏のご協力に、謝意を表す。(上野操「新任の辞」『安城農報』第二四号、二六五頁(安城農事試験場内 安城農芸研究所、一九二五年二月))
- (4) 神谷素光「日本デンマークの諸相」『市制四五周年記念特別展 日本デンマークの姿』大正・昭和の農村振興』(安城市歴史博物館、一九九七年)、六六頁。ただし、神谷の引用文中の改行・傍線は、筆者による。
- (5) 同前。六七頁。
- (6) 安城市歴史博物館「常設展示案内」(同博物館、一九九一年)。本カタログおよびほとんどの安城に関わる文献・資料のコピー(岡田氏著書も含め)は、齋藤弘之氏のご協力を得て入手したものである。謝意を表す。
- (7) 山崎延吉「日本の丁抹」『農政研究』第五卷第五号、一九二六年五月、目次および一五頁参照。古瀬傳蔵「日本の丁抹と日本のグルントキツヒ」『農政研究』第五卷第五号)。
- (8) 岡田は「この地方の産業組合の代表的な指導者」であつた岩瀬和市の自伝(一九七五年)から、「日本における丁抹と大阪毎日新聞に掲載されたのが日本デンマークの始めである」という文言を紹介したが(岡田洋司「ある農村振興の軌跡——日本デンマーク」に生きた人びと』六五—六六頁)、二〇〇四年三月発行の『安城市史研究』第五号掲載の論文「一九二〇—三〇年代における『日本デンマーク』をめぐる言説(一)——八九頁では、岡田は一九三三年の『大阪毎日』に碧海郡を紹介する記事を見出せなかったし、その他の新聞雑誌にもその種の記事は現在までのところ発見できていない、と報告している。
- (9) 岡田洋司「大正デモクラシー下の地域振興」二五四—二五六頁参照。および、本稿の修養会関係の記述は、同書第五章「地域振興における政治・社会運動の位相」による。
- (10) 同前。二五五頁。註(2)に、出典の表記(修養団愛知県支部「夏期体現大学の開設」『清明心』第一四号、一九二三年四月)一七一—一八頁)。
- (11) 同前。
- (12) 岡田洋司「農村社会運動としての修養団の論理と実態——大正後期の愛知県碧海郡の事例」『地方史研究』一七二号、一九八一年八月、二二—二三頁。および、岡田「大正デモクラシー下の地域振興」二四八—二四九頁、表V—5参照。
- (13) Anders Vedel, "Folkehøjskolen og Japan", *Roskilde Højskoles Aarskrift*, 1923, ss. 48-57 og Ernst J. Borup, "En japansk Højskolemand", *Højskolebladet*,

1927, pp. 16-19. これら記事の存在は、一九八五年の筆者の在外研究を前にして現在は北海道東海大学助教、佐保吉一氏から教えられていた。

- (14) 「丁抹謳歌者」という語は、加藤完治の表現で、安易にデンマークに惹かれていく人々を指し、加藤にとってはネガティブな意味合いを持つ。加藤完治『訪欧所感』（加藤完治全集刊行会、一九六七年（自序、一九三三年）内では、「立派な国民高等学校を自動車で一才参観して帰国の途に就くならば、所謂丁抹謳歌者が出来上がる次第である。」（六二頁）とか、「コペンハーゲンの」市街を歩いても不愉快な感じのする事はない。段々僕も丁抹謳歌者となりかけつ、ある」（六四頁）と記す。

- (15) 一九二二年デンマーク入国前にベルリンで、デンマークからの駐独大使館付農業駐在官ヤコブセンに、「次三男問題に対しては、貴君は如何に考へて居るか」と尋ねたと加藤は記している。（加藤完治『訪欧所感』四八頁。）

- (16) 加藤完治『滞欧所感』（加藤完治全集刊行会、一九六七年（訪欧所感）内合本、「序」、一九二九年、「改版について」、一九三〇年）、一九二頁。以降、本論文中の引用文内の（ ）は、筆者による加筆である。

- (17) 加藤の伝記である、小山寛二『荒野の父 加藤完治』（大日本雄辯會講談社、一九四一年）三六頁にある表現。

- (18) 山崎延吉先生生誕一〇〇年記念誌『山崎延吉の生涯』（愛知県立安城農林高等学校同窓会、一九七四年）、一〇頁。

- (19) 同前。一一九頁。

- (20) 丸山彰『深夜の座禪 強かった先生の剣道』（加藤完治先生逸話集（下）（加藤完治全集刊行会、一九六八年頃）、F二八頁。

- (21) 加藤完治『訪欧所感』「自序」に、「洋行不要論者であった僕が、如何にして洋行する様になったかと言ふに」と、事情の顛末を述べている（一〇頁）。

- (22) 塚本虎二・矢内原忠雄編『藤井武全集』（藤井武全集刊行会、一九三二年）第二二巻、二七七一―二七八頁。

- (23) 同前。二八一頁。

- (24) 加藤完治『自叙伝』『日本農村教育』（加藤完治全集刊行会、一九六七年「自序」一九三四年）二一三―二一五頁参照。

- (25) 内村鑑三と国民高等学校の関連を積極的に解釈するのは難しい。オヴェ・コースゴールは、「内村鑑三によって、デンマークとグルントヴィイは、今世紀初頭以来、日本でも知られるようになりました。後には内村鑑三の弟子によって、フォルケホイスコーレをモデルにした国民高等学校がつくられたとも聞いております。」と記したり（オヴェ・コースゴール・清水満編『デンマークに生れたフリースクール『フォルケホイスコーレ』の世界―グルントヴィイと民衆の大学―』（新評論、一九九三年）二頁、また同書一八八頁には、清水満が「のち、内村鑑三の弟子の一人、藤井武が略―フォルケホイスコーレを模した山形自治講習所をつくり、（加藤が）その所長に推薦されて赴任します。というのも、加藤は一九二二年に一年間、デンマークの農業を学ぶべく、シェラン島のロスキレ・フォルケホイスコーレやユランのアスコウに滞在した経験があるからでした」と記している。藤井が、内村の弟子であることは確かだが、そのことと関係して内村がグルントヴィイや国民高等学校に執着したかは、不明である。たとえば、後述の松前重義は、内村の『デンマルク國の話』の主人公を、グルントヴィイだといつたのまにか誤解していたし、内村が「グルントヴィイの如く」と題した一文を記した（一九二六年（推定））のは、旧友渡瀬寅次郎の死に接し、渡瀬の「丁抹流の、基督教の基礎に立てる農学校を起こしたい」という志を語り、彼の名を「グルントヴィイツヒの名が丁抹に残るが如く、わが日本に残したいとの希望を述べ」ようとしたためである（内村鑑三『全集』（新版）（岩波書店、一九八二年）第三〇巻、一八三―一八五頁参照）。その文の限りでは、内村自らが、イニシアティブをとってキリスト教を基礎とする「農学校」を提唱しているようには読めない。そのあたりが、問題である。また、吉武信彦は「内村の紹介以降、デンマークの農業、さらにその担い手の国民の教育機関としての役割を果たした国民高等学校（Folkehøjskole）にも関心が集まり、北欧を訪問する日本人も現れた。」と記

すが(吉武信彦「日本人は北欧から何を学んだか」(新評論、二〇〇三年) 四二頁)、その文脈で碧海郡の「日本デンマーク」と呼ばれることになる」に繋がる。文章展開のためのレトリックのみで、実証が伴わない嫌いがある。それらに共通するのは、「初めに内村ありき」と、決めすぎていることではないだろうか。一方、加藤完治が一九二二年に一年間、デンマークに滞在したという、清水の記述の根拠は何であろうか。

- (26) 加藤完治「自叙伝」、一二四—一二九頁参照。
- (27) 同前、一一九頁参照。
- (28) 加藤完治「日本農村教育」内第六篇「日本国民高等学校」一一六頁参照。
- (29) 同前、一三〇頁。
- (30) 同前、一八九—一九〇頁参照。
- (31) 「加藤完治先生逸話集(下)」「弥栄」座談会記事より(時期不詳)F二頁。
- (32) Anders Vedel, *op.cit.*, s. 48.
- (33) *Ibid.*
- (34) *Ibid.*, s. 49. 以下、引用文中傍線、および括弧内は筆者による。
- (35) A・H・ホルマン著、那須皓訳、「国民高等学校と農民文明」(同志社一九二三年)。「デンマーク語訳版」A. H. Holmann, *Den danske Folkehøjskole og dens Betydning for Udviklingen af en folkelig Kultur i Danmark*, 1910.
- (36) Anders Vedel, *op.cit.*, s. 54.
- (37) *Ibid.*
- (38) *Ibid.*, ss. 56-57.
- (39) Ernst J. Borup, "En japansk Højskolemand", *Højskolebladet*, 1927, nr. 17, spalter 520-521.
- (40) *Ibid.*, spalte 521.
- (41) 「加藤先生 人・思想・信仰(下巻)」(加藤完治全集刊行会、発行年不詳)四〇二頁。加藤完治による喜寿祝挨拶と「そのことば」一九六〇年頃の加藤の言「その人」に居る小平君だと思っんですが、山崎先生に注意

されたか、なんだか寛先生を一つお呼び申して、お話を是非安城で聞けという事になりました。——略——寛先生がおいでになって、簡単明瞭に——いわば、受持分担と一心同体——私は敷島の大和心を人問わば、受持分担一心同体、でい、と思っんですが——そういうことを寛先生から教えていただきました。」と挨拶している。

- (42) 加藤完治「自叙伝」、一六一頁。
- (43) Ernst J. Borup, *op.cit.*, spalte 522.
- (44) *Ibid.*, spalter 522-523
- (45) *Ibid.*, nr. 19, spalter 580-591.
- (46) *Ibid.*, spalte 589.
- (47) *Ibid.*
- (48) 「加藤先生 人・思想・信仰(上巻)」(加藤完治全集刊行会、発行年不詳)一九三—一九四頁参照。
- (49) ヤコフ・ランゲは、オーゼンセでの、繁栄した「デンマーク農村の中ではいわば取り残されたかつての小屋住み農民子弟を対象とする「小農学校 husmandsskole」の校長であり、階級意識から発する社会改造を目指す人物であり、「僕は思想の上では異なっており、階級意識から発する社会改造を目指す人である」と加藤は述べている(「滞欧所感」一三〇頁)。お互いの会話はスムーズではないが、国民高等学校とはカテゴリーが異なり、むしろ、農民の学校、ということ、加藤の関心は高かったと思われる。しかし、加藤の伝記「荒野の父 加藤完治」内では、「ロスキレ」の小農学校で、日ごろのランゲ夫人の日本を軽視する言動にたいし快く思っていなかった加藤が、講演の最中に三尺の棒を振って直心影流の法定の形を披露して、聴衆の度肝を抜くといった武勇伝が記されている(一一八—一二三頁)。
- (50) Se Ernst J. Borup, "Folkehøjskolen udenfor Danmark", i *Danmarks Folkehøjskole 1844-1944*. (Festskrift udg. af Foreningen for Højskoler og Landbrugsskoler, red. J. Th. Arnfried, Lars Bækhoj, C. P. O. Christensen), 1944, ss. 516-517.

(51) 「日本国民高等学校沿革」表によれば、一九三五年、内原国有林の払下げ受け、移転に着手、一九三八年三月、男子部第一、第二部友部から内原に移転、女子部完成移転、四月、満蒙開拓青少年義勇軍訓練所設立、一九四二年、少年部の内原移転により学校の移転を完了、とある（加藤完治「日本農村教育」内第六篇「日本国民高等学校」一五三頁参照）。

(52) Se Ernst J. Borup, "Folkehøjskolen udenfor Danmark", s. 516.

(53) Se Ernst J. Borup, "En Japansk Højskolemand", nr. 18, spalte 548. 「はじめは彼はグロントヴィよりコルをはるかに高く評価しており、グロントヴィを理解するにはあまりに「幅がありすぎる」と評していた。後になって、彼はグロントヴィをもまた高く評価することを学んでいる」と記されている。

(54) *Ibid.*

(55) 出納陽一は、「丁抹の農業」（北海道畜牛研究会編纂、一九二五年）の第一四章「丁抹の偉人グロントビー」を担当し、その「敗戦—偉人出現—祖国復興」の理解のために、後に多くの人々が、内村鑑三の「デンマルク國の話」（一九二一年）のダルガスとグロントヴィを混同する原因を作り出したといえるかもしれない。また、「丁抹に於ける農村の更生と教育」（協同会、一九二六年）は、「労働者教育資料 No. 8」として協同会教務課が発行。

(56) 「松前重義が語るわが昭和史」七、「朝日新聞」一九八六年九月二日号。

(57) 山田英世（愛知教育大）は、「翁（山崎）の古武士即農民の理論を実践的検証する場所が、三重県に私財を持って創設した「神風義塾」である。……

このような塾風の教育は、当時、山形県自治講習所や茨城県内原の日本国民高等学校において典型化され、日本の教育に新活路をあたえるものとして賞賛されながらも、……」と記している。（山田英世「精農型農本思想—山崎延吉論」『山崎延吉の生涯』一九七四年、四七頁）また、山崎の塾風教育の着想をジョン・デューイの教育思想に関連付けて説明しているが（四八—四九頁）、デューイの箇所を「日本の理解におけるグロントヴィ像」と置き換えると、「日本のデンマーク」の教育像が現れやしまいか。

(58) 「加藤完治先生逸話集」下巻E九二頁。早川一男は一九二四年二月一日のことと記す（一九六七年）。

(59) 加藤完治「訪欧所感」那須君が北欧の偉人として伝へられたグロントヴィー、彼は二度妻を失つて三度結婚された。そして其の最後の結婚が彼の七十八才のときだ。婦人は当時三十六才の壮年である。……僕は彼の偉人たることを認むる。又彼の真面目なクリスチャンであったことも知って居る。其の彼が四十二も年下の若き婦人と平気で結婚する、其の心理状態が一才解釈できぬ（七二頁）。……更にグロンドヴィーの実例に依り、僕は何となくコーベンハーゲンに於ける男女関係が甚だしく不純ではないかとの疑問を懐くに至った（七三頁）。

(60) 加藤は四〇歳を超えた未婚女性から、「日本では婦人は普通何度結婚するか」とたずねられ、逆に訊きかえすと、「彼女はまじめに『普通三回である』と答へた。之には僕も驚いた」と記し（六八頁）、また、「子供を生むにも自分等を本位として飽迄も打算的の所、注意すべき点だ」（七〇頁）とも記す。（「訪欧所感」）

(61) 古瀬傳蔵「日本の丁抹と日本のグロントキツヒ」（『農政研究』第五卷第五号）五—一四頁。

(62) 同前。一〇頁。

(63) 同前。一頁。

(64) 同前。

(65) 同前。一二頁。

(66) 吉地昌一編「我農生三十年 興村行脚」（山崎先生還暦記念会、一九三二年）内には、山崎が綴った大正一四（一九二五）年から昭和七（一九三二）年までの興村行脚日記が掲載されており、そこには加藤と山崎の家族ぐるみ付き合ひの断片が登場しているし、また一九二四年以前の活字化されていない山崎の手帳型の日記にも、山崎・加藤の親密な付き合ひを想像させる部分があり、安城市山崎延吉文庫の鈴木美保子氏が、その関係箇所を筆者に対し読み上げてくれた（二〇〇五年七月二〇日）。

(67) 第二次世界大戦後、山崎は「加藤完治、石黒忠篤らの追放のあとを受け、一時、内原の国民高等学校校長をも務める。」と、山田英世が記しており、加藤の国民高等学校と山崎の縁は深い。(山田英世「精農型農本思想―山崎延吉論―」二六頁。)

(68) Se Ernst J. Borup, "En japansk Højskolemand", spalte 549.

(69) 岡田洋司「大正期の『デンマーク』の像をめぐる」『日本デンマークの諸像』六六頁。

(70) 岡田洋司「ある農村振興の軌跡」一六一―一七頁。また、平林は山崎の行く各所に随行し、「活動写真」を持って、デンマーク事情を説明している。「興村行脚日記」にも、その記述が登場するし、一九二六年の日本国民高等学校発起人会にも平林は随行した。山崎は、「平林君の丁抹に関する活動写真の説明があり、一同は益々国民高等学校設立の必要を痛感した。」と記している。(山崎延吉「我農生五十年」(東海毎日新聞社、一九三二年)九二頁。)

(71) 山崎延吉「丁抹の農業」『尊農』第一卷第一号、一九一九年、一四頁。

(72) 山崎延吉「日本の丁抹」(『農政研究』第五卷第五号)一五頁。

(73) 山崎延吉「丁抹の農業」『尊農』第一卷第一号、一〇頁。

(74) 橋本伝左衛門「序」(『訪欧所感』)六頁で、「加藤君は美によく書く。」「ベルリンに於いても加藤君はよく書いた。渡欧雑感や友人知己への通信など。」「そこで数々の所感文となり、通信となった。」「故国に送る所感文を書き上げると、よく僕に読んで聞かせて、僕の評言を求めた。」といった具合に、ベルリン滞在をともしした橋本は記している。

(75) 国民高等学校とデンマークの「ホイスコレ」との違いを確固として認識して第一次訪欧を終えて帰国した加藤は、「日本の」国民高等学校であることから自主的な「日本国民高等学校」を新設、そのときデンマークのそれに似ていなくてもよい――すなわち似ていないことを恐れない――自らの学校が「本場」となる道を選び、そのさきには満蒙開拓青少年義勇軍を生み出すまさに独自の「汗を流す農業実践学校」を作り出すに至った。第

二次世界大戦直後「進駐軍」の調査を受け、一九四六年、校長ほか五名の追放処分を受けた。そして、一九五〇年「日本国民高等学校」は「日本高等国民学校」に改称、その名称は現在に至る。(前出、「日本国民高等学校沿革」の、年表参照)。

(76) Ernst J. Borup, "En japansk Højskolemand", spalter 588-589.

(77) 加藤完治「日本農村教育」二二八頁。

【附記】 本稿は平成一五年度早稲田大学特定課題研究助成費(二〇〇三A-〇三〇)の研究成果の一部である。